

---

# 死体は桜を朱（あけ）に染め

水月蒼也

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

死体は桜を朱あけに染め

### 【Nコード】

N5419A

### 【作者名】

水月蒼也

### 【あらすじ】

四月も終わりに近づく。だが標高の高いこの町では桜が盛りだった。幼なじみである譲ゆずると凜りんは近所の学校に植わっている桜のそばを歩く。穏やかな春の、なんでもない一日のはずが……。

死体は桜を朱（あけ）に染め

(前書き)

一応ホラーです。ホラーな部分は多くありませんが苦手な方は心臓の準備をしてください。この作品は『さくらが咲いたよ』(by久石譲さん)』という曲を聴いていきなり思いつきました。そのまま何時間かで一気に書き終わりました。歌詞も曲も妖しげないイイ雰囲気でした。いつになく現代物です。ファンタジーですらありません。私にしては物凄く珍しい作品です。

死体は桜を朱(あけ)に染め

季節は春。俺たちの住む町は標高が高く、一年を通して気温も低く避暑地としてわりと有名だ。だから、四月が終わろうとしている今でもまだ桜が咲いていた。

家の近くの学校に植わっている桜を一本一本眺め、やけに色の濃い桜を見つけてふと思った。

『桜の木の下には死体が埋められている』  
元ネタはたしか何かの小説だったと記憶している。その作品を読んだことはないが。

桜並木の近くを歩きながら幼なじみの凧りんを振り返って言う。みる。「なあ、『桜の木の下には死体が埋まってる』って知ってるか？」  
「え、聞いたことある気がするけど……。桜見ながら言うのやめてよね！」

凧は少し怒りながら言い返す。

「いま思いついちまったんだから仕方ねーだろ？ 迷信なんだしさ」  
俺はあくまで軽く言う。

ホラーはわりと好きだが、俺だって実際に体験したいわけじゃない。幻想の……違う世界に存在するから好きだと言えるのだ。

「ったく……譲ゆずるはそういうの好きだよね」。話の相手にされることとしては迷惑以外の何物でもないけど」

凧は本当に迷惑そうに据わった目を俺に向けた。

俺は苦笑して視線を桜に向けた。

桜は散り始めで、風の中に花びらが舞って今が一番綺麗な時期だろう。

日本人は昔から桜を好む。中世では、多分桜を詠んだ歌が最も多いだろう。『桜色』なんて色もある。桜の木を英語でジャパニーズチェリーと言うくらい桜＝日本のイメージが強い。

ポピュラーなのはソメイヨシノだが、これはもともと江戸時代にオオシマザクラとエドヒガンを掛け合わせた、どちらかというところのものと言えらるう。昔から日本に多くあるのはヤマザクラと言われるもので、ソメイヨシノと比べるとわりと白っぽい色をしている。

まあ、授業で桜を調べる課題が出たから、ほんの興味でインターネットでさらっと見たという程度の知識だが。

それはともかく、きつとこんなに綺麗だから『木の下に死体が埋まってる』だの、『人を狂わせる』だのと言われるんだろう。

そう思っで見ると、吸い込まれそうな薄紅色の花は妖しい魅力を放ち、このたくさんさんの空を舞う花びらに呑み込まれ包まれたら自分は消えてしまふんじゃないか、なんて馬鹿なことも思ってしまう。

そこまで考えて、我ながら詩人だと自嘲する。

「譲。なーにぼつとしてんの！ 早く行こう？」

凜に大声で呼びかけられてはつとする。どうやら考えにはまり込んでいつの間にか立ち止まっていたらしい。

「あ、ああ。わりい……桜が綺麗だなーって思ってたさ」

とりあえず益体もない言い訳をする。さっきは詩人だったのに、今の俺はなんなんだ？ 自分のなかでダメ出しすると、それに追い打ちを掛けるように凜の声が掛かる。

「うーわっ、なに言ってるの？ 頭だいじょぶう？ 病院行きましようかー？ 脳外科？ それとも心療内科とかかなあ……」

ふんつ。どうせガラじゃねーよ。自分でも解つてらあ。

下を向いて溜め息つきつつ首を振ると、急に風が強く吹いた。

「きゃあっ、すっごい風！ あっ、髪がー！」

叫びながらわたわたしている凜の声を聞いていると、それが急にやんだ。

「？ 凜、どうし……、？！」

顔を上げると、すぐ目の前にメートルあたりにいるはずの凜がない。代わりに、凜がいたはずのその場所には、舞い上がりもせず

に地面に積もった異常なほどの量の花びら。

「な、なん……?!」

俺は茫然として半ば無意識にその花びらの積もった場所まで歩く。  
「凜？ 凜……どこに行つたんだよ？」

状況の有り得なさを次第に俺の脳は理解していき、そうしてはつきりと形を取った感情は『恐怖』だった。

「り、ん……凜ツツツ!!! 返事をしろッ、凜！」

俺は必死で叫んだ。そうすれば凜は笑って慌てふためいてる俺を馬鹿にしながら出てくるって、そう信じているみたいに。

でも、凜は出てこない。

解ってる、凜は消えた。理由も原因も、なんにも解りやしない。でも、そうなんだ。凜は消えたんだ。

何度も、何度も凜の名を叫んだ。凜がどこにいても、聞こえるように。返事ができるように。

馬鹿みたいだが、今の俺はそんなことしか思いつかない。

「……………る……………」

俺ははつとした。かすかに、声が聞こえた気がしたから。

「凜！ いるのか!? 返事をしろ、俺を呼べ、凜!!!」

「……………ず、る……………ゆず、る……………」

聞こえる。たしかに聞こえる。俺の名前。俺を呼ぶ声。

「凜、どこにいるんだ!? もっと、もっと声を……………!!」

「譲……………助けて……………」

「凜!?」

今までで一番はつきりと聞こえた。『助けて』!? どういうことだ?

俺は声のした方を振り向いた。そこは桜の並木のあるはずの場所。俺は桜に近付いていく。さっき目に留まった、濃いピンク色をした桜だ。

「凜……………」

桜の幹に両手をついて項垂れる。

ぎよつとした。

目の前……つまり、木の根本に白い物が見える。いや、もつと正確に言えば、腕だ。白く細い腕。それが土からいきなり生えているのだ。

腕は天に伸び、何かを掴むように手のひらを閉じたり開いたりする。

「ま、さか……凜、か？」

半信半疑……というか、本当にまさかという思いで口にする。

「譲……助けて……ゆず、る……」

声は今までで一番近い。やっぱりそうなのか！？

俺は無我夢中でその手を握り、引っ張り上げようとする。

どうしてこんな短時間でこんなに埋まることができんだとか、どうやって埋まったのかとか、この腕は本当に凜のものなのかとか、そんなこと考えてない。考えられない。

だってそうだろう！？ こんなものを目撃して冷静でいられる人間がいるんなら是非紹介してほしいね！

「凜、凜っ！ いま助けてやるからな！！」

俺は片手で凜の腕を握り、片手で土を掘った。

素手だったから、あつという間に手は汚れ、爪が剥がれかけたが、気になんかしていらなかった。

だんだんと腕の先が出てくる。肘までしかなかったのが、二の腕が見え、肩が見え、そうして掘る場所をずらすと顔が見えた。

「凜！！！！」

その顔はまさしく凜のものだった。

「ゆず、る……」

俺の名前を呼ぶ声にはもう力がない。そりゃそうだ。なんで外に声が届いたのかも解らないくらいなんだから。相当叫んだのだろう。

「いま助けてやる！ もう大丈夫だ！！」

安心させるように力強く言う。

「う、ん……」

凜はほんの少しだけ、弱々しく微笑んだ。

俺は凜の腕を掴んでいた手を離し、両手で土を掘った。少し掘っては引っ張り上げ、また掘って……の繰り返し。

そしてとうとう、凜の全身が外に出ようとしていた。

あと土の中にあるのは、凜の右足首だけ。

そう思っ引っ張ったら、何かに引っかかるように動かない。

「なんで……………」

俺が呟くと、凜が応えるように言った。

「譲……………足、何かに、掴まれて……………」

それ以上恐くて言えない、という風に凜はぎゅっと目を閉じて首を振った。

「……………」

俺は無言でその場所の土を掘った。

だんだんと見えてくる。凜の足首に絡み付くようにある、何かが。

凜の足首の先まで見えた。すべて外に出た。

「……………これ……………」

俺はそれ以上言葉が出なくて口を噤んだ。

凜の足を掴んでいた『それ』は白かった。

土から出ていた凜の腕も白くてぎよつとしたが、『それ』の白さはそんなもんじゃない。質の違う白さだ。

凜が自分の足を掴んでいる『それ』を信じられないという目つきで凝視している。

「ねえ、これ……………骨……………？」

そう。凜の足に絡み付いていたのは骨だった。しかも、察するに人間の。

その骨は、ちょうど手のひらの部分。それが本当に足を掴むような形だった。

そんなはずはない。骨と骨を繋ぐ、神経や筋肉などはとうに朽ちて、たとえその骨が掴むように動いたとしても、掴んでいられることなく外れてしまうはずだ。

なのに、引っ張っても動かなかった。

いや、それよりも、人間が埋まっていたとしても、何らかの理由で凧が埋まってしまったのだとしても、骨が凧の足首を掴めるはずがない。動かないのだから。

……動いたのだろうか？ 凧を自らと同じくするために、足首を掴んだのだろうか？

「まさか」

俺は無意識に呟いた。そう、まさかだ。それじゃ本当にホラーになっってしまう。

だが、凧は俺が一瞬目を離れた隙に消えたのだ。気付いたら土に埋まっていたのだ。そして、足首には……。

すべてが立派な超常現象だ。普通の理論を当てはめて考えるべきではない。

「……………」

俺は考えることを放棄した。

ただ、いまもなお強く凧の足首を掴んでいる指の骨を一本一本剥がしていく。

凧の足首には、くつきりと跡がついていた。骨が掴んでいた形そのままに。

「ゆず、る……譲……譲う……………」

恐怖からか、緊張の糸が切れたのか、凧は俺の名を呼びながら次第に涙ぐんでいく。

その細く華奢でか弱い腕は、震えながら俺に伸ばされる。

俺は凧を力強く抱き締めた。凧の手が俺の背中にまわされ、服を強く掴む。やはりまだ恐怖は去らないのだろうか。

「大丈夫だ……凧、大丈夫だから……………」

泣きじゃくる凧を安心させるように俺は何度も繰り返した。凧の涙が止まるまで。凧の震えが止まるまで。凧の恐怖が和らぐまで。

凧が落ち着いたあと、俺は携帯電話で警察に通報した。

骨はすべて掘り出された。服装から女性だと断定された。どうして桜の木の下に埋まっていたのかは依然として不明だ。

俺たち二人は警察から事情を聞かれた。俺はただ、「桜の木の下に白い物が見えたから、試しに掘ってみたら骨が出てきてびっくりした」

とだけ言った。

凜は全身が土にまみれ、警察にもかなり怪しまれたが、本当のことを話すわけにはいかない。

いや、別に話してもいいのだろう、信じてもらえるならば。

俺は信じてもらえるはずはないと断定し（実際に体験し、この目で見た俺ですら未だに信じられないのだから）、どんなに怪しまれても「偶然骨を発見した」の一点張りで通した。きつと、それで正解だったと思う。

そんなこんなで、事件は一応の幕を閉じた。

きつと、あの女性の遺体については迷宮入りだろう。いつから埋まっていたのかすらも判定できないのだから。

そして、どうしてあんなことが起きたのかも、きつとこの先一生分かる時は来ない……それは、俺の確信。

でも、いい。

解りたいなんて思わない。奇跡的な何かが起こって、真実を知ることができると言われても俺は拒むだろう。

そんなことを知ったとしても、あの恐怖はいつまでも消えてはくれないのだから。

もう、終わり。

それでいいだろう？

桜の木の下には、死体が埋まっている……。

(後書き)

どうでしたでしょうか？ 感想・批評などよろしくお願いします。  
感想が書かれたらまたこんな書くかもしれません。その前に作者は狂喜して拝みますが。ちなみに余談として主人公の名前は実際にいる私の幼なじみに無断で拝借しました。ですがモデルというわけではありません。凜の名前は勢いです。ここまで読んでくださった根気のあるあなた！ お疲れ様でした！ 毎日読者数をチェックして戦々恐々としています。本当にありがとうございます。水月蒼也（みづきそうやと読みます。一応。我ながら読みにくい名前……）でした。

死体は桜を朱（あけ）に染め

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5419a/>

---

死体は桜を朱（あけ）に染め

2009年2月17日08時08分発行